

## 説教「ルターの祈り」

### 詩篇 1 篇 (口語訳聖書)

1976.10.31

宗教改革記念礼拝

日本バプテスト同盟 関東学院教会

読書の秋と言われるにふさわしい時期を迎えていますが、最近のキリスト教出版書の中で目立っているのが祈りについての書物であります。その中の一つに、「ルターの祈り」というのがあります。今朝は宗教改革記念日にあたりますので、ルターの宗教改革と祈りの関係を学びたいと思います。

今からほぼ460年前の今日、1517年10月31日、ルターが95カ条の公開質問状をヴィッテンベルク教会の扉に貼り付けて、中世の教会のあり方に対して討論を求めたことが宗教改革運動の発端になりました。この運動の根底にある教理は、御承知のとおり、信仰によって義とされるというテーマでありました。ルターによれば、信仰ほど重要なことはなかったのであります。人間が本当に基盤としないといけないのは信仰である。しかし、この信仰の生活は祈りの上に据えられていなければならない。信仰とは神との正しい関係であると言えますが、正しい関係としての信仰は純粋な祈り以外のものではない。まさしく、私たちの信仰は祈りと呼ばれるものである、と言っています。

さらにまた、信仰は人間の内側の考えによるものではなく、神との生きた交わりです。この交わりの中で絶えず神からの働きかけを受け取り、神に向かって告白するのであります。この交わりにおいて、外から私たちに与えられるのがキリストの義であります。信仰によって、私たちは神の前に義とされ正しいとされる神の義を着せられるのです。私たちの内側の状態によって左右されないのです。同様に、私たちの罪でさえも、自分自身の内にある欠陥や失敗ではなく、神との交わりから脱落することであると言います。信仰は神との人格的な関係である、と言われるとおりであります。

この神と私とが生きた関係にあることを具体的に表明しているのが、祈りであります。信仰によって義と認められるという宗教改革の根本テーマは、実は祈りという、神との生きた関係に基づいているのであります。祈りに関する書物が最近、キリスト教会向けに出版されているということは、今日の教会が立ち返るべきところに立ち返りつつあることを物語っているものだと思います。

以下において、ルターが祈りについて教えているいくつかの点を取り上げてみたいと思います。

ルターが床屋のペーター君に自分がどんなふう祈っているかを示して、祈りについての教えを書

き送っている一節があります。

私はほかの仕事や考えによって祈りに冷淡になったり気が向かなくなったりと感じるときは（肉と悪魔はいつでも祈りを妨げ、妨害するのだが）、小さな詩篇の書を抱えて、自分の部屋に急ぐ。そして、詩篇のいくつかの箇所を、ちょうど子どもがするように、口に出して自分に言い聞かせるのだ。だから、人が朝早くすべき第一の仕事として、また夕べになすべき最後の仕事として祈ることは良いことである、と教えます。もう少し待ってくれ、あと一時間もすればお祈りしましょう、その間にあれやこれやの仕事を片づけなくちゃならない、そうやって自分を欺くのである。こういう考えでいると、祈りから離れて仕事に取りかかり、すっかり取り紛れて、その日は祈ることなく終わってしまう。

祈りと同じくらい良い、否、祈りよりももっと良い業があるように思えるかもしれない。必要に迫られているときには、ことにそうである。「信仰者のすべての業は祈りである」「真剣に働く者は、それによって二倍も祈っていることになる」。そういう格言もあるが、しかしそれは、信仰者がその仕事において神を畏れ、崇め、神の戒めを憶えて不正を働かず、詐欺を働かないからそう言われるのであり、またこういう考えや信仰というものは、業から祈りや讚美の献げものを生み出すものであるということを示しているのである。祈り以上に良い業はないのである！

反対に、不信仰な者の業は働きの中で神を侮り、神の戒めを犯して、隣人に対し不正を働く。不真面目に働く者は、二倍の呪いを招く。人は絶えず、罪と不正に対して自分を守らなくてはならない。詩篇 1 篇 2 節に「神の戒めを昼も夜も思っている人は幸いである」とあるとおりだ。だから、正しい祈りから遠ざからないよう、祈りよりも自分の仕事が大事だなどと考えないように注意しなさい。自分の仕事は決して、そんなに大事なものではありません。そんな考えだから、祈ることを怠け、怠惰になり、冷淡になり、無精になるのである。このように言うのは、悪魔は私たちに対して決して怠けても怠惰にもなっていないからであり、同じように、私たちの肉は罪に対してはまことに生き生きと活発であるが、祈りに対しては快く思わないからである。

ペーター君にこのように教えた後、ルターは祈りの一つの模範を書いています。

愛する神よ、私は価値のない哀れな罪人です。目を上げて、あなたに祈る価値もありません。しかし、あなたは私たちに祈るように命じ、それを聞き届けてくださると約束なさいました。そのうえ、あなたの愛したまう御子イエス・キリストによって、祈りを教えてくださいました。それゆえ、私は従順にあなたの御前に出て、あなたの恵み深いお約束に身を委ねます。そして、主の祈りが続いています。

私たちは、どれほど立派な仕事に従事していると自信を持ってそう言える者であっても、ルターのこの祈りのように、幼子のようになって日々祈ることを怠ってはなりません。悪魔は決して、怠けていないからであります。

〔朝の祈り〕ルターはこう祈っています。

神よ、天にいます私たちの父よ、あなたの愛する御子イエス・キリストによって感謝いたします。あなたは昨夜、すべての災いより私たちを守られました。今日もまた、罪と悪より私たちを守ってく

ださい。そして、私たちの行ないと生活を御心みこころにかな適うようにしてください。私たちは、体と魂とすべてのものを御手みてに委ねます。あなたの聖きよき天使が私たちと共にいて、悪しき敵が私たちに力を振るうことがありませんように。アーメン。

〔夕べの祈り〕

天にいます父なる神よ、愛する御子イエス・キリストによって感謝します。あなたは今日も、恵みをもって守ってくださいました。父よ、あなたに請い求めます。私たちがなしたすべての悪しき罪を赦ゆるし、この夜も恵みをもって守ってください。私たちは、体も心もすべてのものを御手に委ねます。あなたの聖なる天使が私たちと共にあり、悪しき敵は私たちに力を振るうことができません。アーメン。

この簡潔な祈りの中で、ルターは、悪しき罪、悪しき敵と呼ぶものの働きに対し、それから守ってくださいるようと真剣に祈っています。ルターの祈りには、なぜこのように、悪魔が力強い敵として出てくるのでしょうか。それは、悪魔が、神との生ける関係からルターを引き離す力であるからです。それが、神との関係から自分を脱落させる力を振るうからです。ですから、神との生きた関係を正しく保つてゆくために、祈りを止めることができなかつたのであります。

また、この祈りに一貫しているのは、恵み深い神の御手に身を委ねますと言っていることです。自分の力によって悪魔的な罪の力に打ち克つことはできません。かえって、罪の支配のもとにある自分が哀あはれな罪人つみびとにすぎないことを思い知らされます。しかし、神に信頼し、神のみを己おのが避けどころとするとき、そして神の支配のもとに自分を委ねますと告白するとき、その信仰を媒介とし、神の賜物として神の義を、この私のものとして与えてくださる。神の義は私にふさわしいものとして与えられるわけではありません。キリストにおいて、私たちが義なる者と見てくださるのです。こうして、私たちが神との正しい関係に引き入れてくださったのであります。

ルターは詩篇の講解の中で、この関係を最も明確に示してくれています。「私はキリストのものである。すなわち、キリストの義と勝利と生命は私のものである。そして、キリストは私にとって代わって、こう言われる。『私はあの罪人つみびとである。すなわち、彼の罪と死とは私のものである。というのは、彼は私に屈し、私は彼に屈しているからである。そのわけは、我々は信仰を媒介として、一つの肉と骨に結びつけられているからである』」

同じ内容は祈りとなっています。

ああ主よ、私の罪はあなたの（負いたまう）罪です。あなたは私の義です。だから、私は勝利を得、安全であります。私の罪はあなたの義に勝つことはありませんし、またあなたの義は私を罪人つみびととせず、私が罪人とどとして留まっていることを許さないからです。私の主なる神、憐れみの主、私の贖あがない主ぬしよ、私はあなたにのみ信頼いたします。どうか、私を辱はずかしめないでください。アーメン。

この神と私の関係を告白することが祈りである。この関係の中に身を委ねることが信仰であります。

ルターは毎朝、毎晩、時には食事中にでも祈りをささげたとのことです。マテジウスはルターの祈りを目撃し、こう言っています。「私は、博士がしばしば目を上げ、独特の仕方で手を天に挙げて

いるのを見た。歩きながらも立ったままでもそうした。そして、祈るのを聞いた。時にはお客を食卓に残して、窓辺に寄って、半時間も祈った」と。ルターの『桌上語録』を書いたディートリヒも、「勉強に最も良い時間を少なくとも3時間は祈りに費やさない日とてなかった」と。祈りのために5分や10分すら割くことも惜しんでいる私たちにとって、真剣に反省すべき姿です。ルターの祈りが記されているのは、ルターが大きな声で祈ったからだと言われます。私たちは、公の祈りは別として、個人で祈るとき、人が入ってきたりすると祈りを止めてしまいます。ましてや、人に聞こえるほど言葉を出して祈ることはしていません。病院に訪問に行っても、なるべく周りの人に聞こえない、本人だけに聞こえる程度の声で祈るのがやっとです。祈りにおいて、私たちは自分の信仰が問われているようにも思います。

ルターがヴォルムスの国会に喚問され、場合によっては死刑の宣告をも覚悟せねばならなかったその国会に臨むにあたって祈ったという祈りが記されています。その祈りの中で、「ああ神よ」と、4度も続けざまに神に呼びかけています。

私は、このような偉い君主たちに対抗しようとは、生涯予想もしませんでした。ああ神よ、ですから、あなたの愛したまう御子イエス・キリストの御名において、私と共にいてください。主こそ、私の避けどころです。また、逃げ場です。否、希望の力と勇気によって、私の高き櫓です。・・・私はこの事件のために、小羊のようにおとなしく、自分の命を捨てる覚悟です。この世は悪魔に満ちていても、私の体を地に打ちつけて獄に連れていったとしても、私の良心を強制することはできません。どんなことがあっても、あなたの御言葉と御霊とがあれば大丈夫です。彼らは、私の体に手をかけることができるだけです。魂はあなたのもの、あなたに屈し、永遠にあなたものです。アーメン。神よ、私を助けてください。アーメン。

この祈りがヴォルムスの国会でのあの有名な答弁の本になっているのであります。ルターの有名な宗教改革の讃美歌は、この祈りが歌となったものであります！ルターの祈りにおいて祈りの力強さ、信仰の源泉としての祈りについて深く学び、ルターと共に、祈る信仰の生活を力強く歩んでまいりましょう。